

[12] 日向市小体連

(学校数13校 児童数3168人)

I 年間事業

実施日	事業名	主な内容	会場
5月8日(月)	市小体連第1回理事会	役員選出 年間計画 研究の進め方について	市教育研究所
7月3日(月)	市小体連第1回役員会	日向市陸上大会について	財光寺小学校
7月26日(水)	市小体連第2回理事会	日向市陸上大会について	市教育研究所
8月21日(月)	市小体連第3回理事会	日向市陸上大会について エントリー選手検討	市教育研究所
9月21日(木)	市小体連第4回理事会	日向市陸上大会について (役割分担等)	市教育研究所
10月26日(木)	市小体連第5回理事会	日向市陸上大会について 最終確認	市教育研究所
11月9日(木)	市小体連第6回理事会	前日準備	大王谷陸上競技場
11月10日(金)	令和5年度日向市陸上大会	大会本番(中止)	大王谷陸上競技場
2月下旬頃	日向市小体連第7回理事会	年間反省・来年度について	市教育研究所

II 事業部のあゆみ

1 陸上大会(雨天のため中止)

- (1) 大会名 令和5年度日向市小学校陸上大会
- (2) 実施日 令和5年11月10日(金)
- (3) 会場 大王谷陸上競技場
- (4) 出場者 日向市内小学校6年生全児童(小規模校は5年生児童含む)
- (5) 実施種目
○ 走り高跳び ○ 走り幅跳び ○ 50mハードル走
○ 短距離走(100m) ○ リレー(100m×4名)
○ 長距離走(男子1000m、女子800m) ○ ソフトボール投げ
- (6) 競技方法
 - ・ 選抜での出場はリレーを除き、1人1種目とする。
 - ・ 「走」競技は、スタンディングスタートとする。
 - ・ 「走り高跳び」については、ベリーロールや背面跳び等危険を伴う跳び方は行わない。
 - ・ 靴は、普段体育で使用する運動靴とする。
 - ・ その他細部については、日向市小学校体育連盟による競技規則を適用する。

(7) 反省

今年度は4年ぶりとなる開催の方向で動いていたが、天候不順のため中止せざるを得なかった。久しぶりの大会開催ということもあり、選手の選考や練習の期間等悩むことも多かったようだが、児童においてはそこを目標に仲間と助け合いながら努力する姿も多く見られた。しかし、大会開催にあたっては、前日準備の人数が各学校の体育主任だけでは到底足りなかったことや、仕事内容の人数の割振りやタイムマネジメント等、実施していたとすれば課題が多々あることも見えたため、来年度に向けてしっかりと引継ぎ・計画をしていく必要がある。

Ⅲ 研究部のあゆみ

1 研究主題・副題

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った体づくり運動の授業実践を通して～

2 主題設定の理由

日向市小体連では、令和元年度より3年間、体力向上プランで課題となっていた種目について改善を図るためには、日々の授業の中でどのような取組みや工夫を行えばよいかという視点で研究をしてきた。指導法の改善や新たな教具等の購入によって、課題となっていた立ち幅跳び・ボール投げについては一定の改善が見られていたが、柔軟性と持久力の項目については平均を下回る結果が続いていた。

そこで本市では、昨年度から運動の基礎・基本となる体づくり運動に視点を当てて、児童が進んで体を動かし、運動する楽しさや目標を達成できた時の喜びを味わわせながら研究を行うことが、結果として柔軟性や持久力の向上にもつながるのではないかと考え本主題を設定した。

3 研究仮説

一単位時間の中で何を身に付けたいのか、授業のはじめに必ず確認し、学習カードの作成やICT機器の活用などの授業改善・工夫を行えば、児童一人一人が進んで体を動かし、運動する楽しさを味わうことができるだろう。

4 研究内容

1 指導方法の工夫・改善

- 主体的・対話的で深い学びのある単元を見通した学習計画
- 一単位時間の中で身に付けさせたい力の共通理解

2 技能向上を図るための手立てと工夫

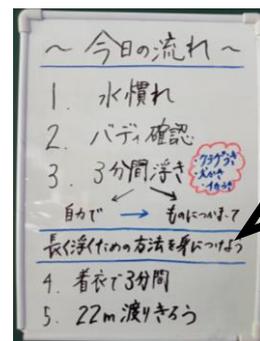
- ICT機器の活用

5 研究の実際

(1) 指導方法の工夫・改善について

主体的・対話的で深い学びを実現するためには、児童が「わかる」と「できる」を実感しながら学習を進めていくことが大切であり、そのためには技能習得の過程を通して思考力・判断力・表現力等を働かせて課題を解決していく過程が重要となる。そこで、昨年度作成した「学習内容系統図」をもとに、児童が「いつ」「何を」「どのように学ぶのか」「何が身に付いたのか」の視点で計画を立てることで、一単位時間で学ばせる事柄を明確にし、系統立てて指導していくことに重点を置き指導の改善を行った。一時間の流れを提示し、その時間に何ができればいいのか、その目標を達成するためにはどうすればよいのか等、視点を明確にすることで、児童が自ら進んで考え、仲間と協力しながら楽しく運動を行うことができるようになった。このような指導の工夫・改善を行ったことで、指導経験の浅い先生でも、授業の要点や授業の組み立て方を理解し、

【写真①】



その時間で何を身に付けさせるのか？
(ゴールイメージ)

【写真②】



見通しをもって授業を進めていくことができた。

(めあてと1時間の流れの提示)

(2) 技能向上を図るための手立てと工夫について

運動のポイントや自分の役割を自ら理解し、自ら思考、チャレンジすることで、より深い「わかる」「できる」運動につながると考えた。それを達成するための手段として、タブレット端末を活用し、ポジショニングや作戦等を児童同士で考えさせたり、自分達の動きや相手チームの動きを撮影し、良い動きや課題等を確認させたりした。(写真③)

ICT機器を活用することで、チーム内での考えの共有はもちろん、視覚的に作戦や動きを捉えることができるため、活発に意見が出たり良いアイデアが生まれたりした。また、運動が苦手な児童も自分の役割が見えてきて、活動できないことが減りポジティブに運動に参加できるようになった児童もいた。

また各学校で、ルールの共通理解、視点の共有、ゴールイメージの明確化、動きのポイントの焦点化等に活用し、達成となる動きに近付くような工夫が挙げられた。さらに、その時間の自分の動きやチームとしての評価等もデータとして残っていくため、成長の変化を見ていくこともでき、さらなる技能向上を目指して主体的に取り組む姿が見られるようになった。(写真④)

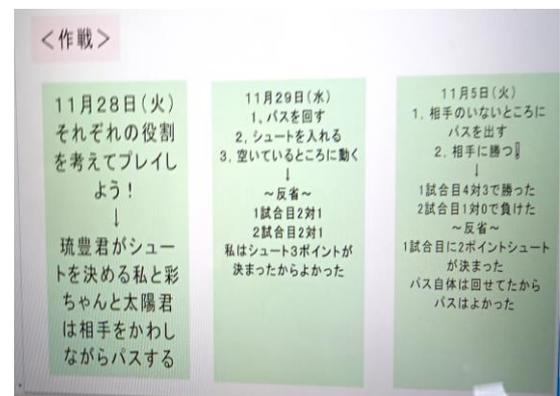
市内ではタブレット端末が1人1台配当されており、体育学習に関心の高い児童の中には、休み時間にこれまでの記録を確認したり、次の時間の作戦を友達と一緒に話合ったりする姿も見られるようになり、体育学習に対する意欲の高まりも感じ取ることができた。

【写真③】



(作戦ボードを使った作戦の共有)

【写真④】



(毎時間のふりかえりと次時に向けて)

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- その時間の学習の流れやめあてを確認したことで、運動のポイントや身に付けさせたい力が明確になり、指導を統一しやすくなった。
- 撮影した動画で、自分の動きを見返したり、友達にアドバイスをもらったりすることで、次時の課題が明確になり、課題解決に向けて主体的に取り組もうとする姿を見取ることができた。
- 運動の苦手な児童も、個人として、またチームとしてどんなことができるのか、自分にできる役割が何なのかを理解できるようになり、進んで運動に参加できるようになった。

(2) 課題

- ICT機器は便利なツールであるが、操作の時間や動作不良等、時間を費やしてしまうこともあるため、運動量を削ってしまわないような使い方を考える必要がある。
- 各学年発達の段階に合わせた、体育科学習でのICT活用法系統図等があると、学校内や市内でも統一されたICT機器を活用した体育の授業を行うことができる。

